

自作の道徳郷土資料を活用し、道徳の授業を活性化させる

三浦 摩利 (多摩市立多摩中学校 主任教諭)

1. 自作資料「花火大会」について

(1) 道徳資料を作成することになったきっかけ

- 平成20年度に東京都の道徳授業地区公開講座推進委員会の委員として『小・中学校 道徳教育郷土資料集 第3集』の編集に携わった。
- 多摩市の郷土資料と、活用例の作成を担当し、「花火大会(多摩市)」という資料を作成した。

(2) 地域郷土資料開発するということ

- 学校で取り組んでいるボランティア活動を題材に。
- 地域で話題に。(「せいせき多摩川花火大会」の実行委員会の会議に出席して、披露する機会)

2. インタビュー映像のDVDを作成

- ゲストティーチャーの力を借りたいが、いろいろ問題が…。
- 事前にインタビューして、映像化すればよいのでは。時間のコントロールの問題○



図1：DVDタイトル画面



図2：DVD画面(清掃参加者の写真)

インタビュー映像には字幕を入れて、生徒にメッセージが伝わりやすいように工夫をした。せいせき多摩川花火大会実行委員長塩沢さんへインタビュー。



図3：①インタビュー開始



図4：②花火大会実行委員会の仕事

～インタビューの間に、別の場所で撮影した映像を入れて、メリハリのある内容にした～



図5：聖蹟桜ヶ丘駅の募金箱前にて



図6：多摩川河川敷、花火大会会場にて

～インタビュー映像再開～



図7：③花火大会翌朝のゴミ拾いについて



図8：④中学生へのメッセージ

～せいせき多摩川花火大会実行委員長へのインタビュー後は地域の方へインタビュー～



図9：多摩川河原にて



図10：多摩川土手にて

最後に地域に住んでいる方々に「せいせき多摩川花火大会」についてインタビューをして、地域の方々の生の声を伝えた。「せいせき多摩川花火大会」が地域で愛され、みんなが楽しみにしているイベントであることが伝わった。

3. 研究授業「花火大会」

(1) 授業対象クラスと授業者

授業対象者 多摩中学校 1 学年 C 組 男子 17 名 女子 22 名 計 39 名
授業者 三浦 摩利

(2) 日時

平成 22 年 7 月 14 日 第 5 校時 (13 時 35 分～14 時 25 分)

(3) 問題と目的

中学校での道徳の時間の授業を活性化させるための工夫についてさまざまな取組を行う。①自作の道徳教育郷土資料を用いる。②ゲストティーチャー的な役割として、地域の方へのインタビュー映像を用いる。③話し合い活動を授業の中に取り入れる。④ワークシートの工夫する。①～④の取組が道徳の授業を活性化させるために有効であるか、事後アンケートにより検証する。

4. 「花火大会」指導案

(1) 主題名「よりよい社会の実現」内容項目 4－(2)

(2) 資料名『花火大会 (多摩市)』東京都道徳教育郷土資料集 (第 3 集) より

(3) 主題設定の理由

1) ねらいとする価値について

中学生になると、体の不自由な人へのいたわりある行動や社会福祉施設等のボランティア活動に共に取り組むなどよりよい社会の実現を求める気持ちが強くなっていく。

社会生活においては、すべての人々が自分も他人もともどもによりよく生きようとしていくということを自覚することから、互いに助け合い励まし合うという社会連帯の自覚も出てくる。よりよい社会の実現に向けた個々の努力の積み重ねが必要である。

指導にあたっては、生徒一人一人に自分も社会の一員であるという自覚を深めるようにして、互いに積極的に協力し合おうという意欲を育てるように工夫することが大切である。

2) 資料選定の理由

本資料では、主人公の直子が初めて体験するボランティア活動に共感させながら、生徒が自らを振り返り、他の人々との協力やよりよい社会の実現について考えさせたい。

「せいせき多摩川花火大会」は、ボランティアの実行委員会を中心として、多くの市民が協力して行う花火大会である。陰で支える多くの人たちのおかげで花火大会の成功があることに気付かせたい。

3) 生徒の実態

運動会ではクラスの一員として、郊外学習(飯盒炊さん)では班の一員としての自覚をもって、互いに積極的に協力し合おうという意識が芽生えてきている。ただ、多摩中学校の一員として、地域社会の一員としての自覚は十分とはいえない。『花火大会』の資料を通して社会の一員としての自覚を深め、互いに協力し、よりよい社会を実現しようとする態度を育てていきたい。

(4) 指導の工夫

1) 【生徒の興味関心をひくための資料】

生徒の興味関心をいだかせるために、多摩中学校の生徒がボランティア活動に参加していることがモデルとなった自作の読み物資料を用いる。また、展開の最後に自作の DVD を見せる。せいせき多摩川花火大会実行委員長、塩沢三男さんから生徒へのメッセージ映像を流すことによって、ゲストティーチャーの話を生徒が聞くことと同じ効果が期待できる。

2) 【ESD の視点を取り入れる工夫】

多摩市が推進している ESD (Education for Sustainable Development) 「持続発展教育」の視点を意識する。

※地域の人々との連携・・・地域にあるものの教材化→資料「花火大会(多摩市)」

DVD「地域の方へのインタビュー」

※多様な価値観を認め、尊重する力・・・いろいろな人の意見を聞く活動(クラス、グループでの話し合いで)

※気持ちや考えを表現する力・・・意見を伝えあう活動、気づき合う場づくり(クラス、グループでの話し合いで)

3)【4人組内での発表、話し合い】

中心発問3では、4人組(または3人組)で発表し合い、自分の考えとの共通点や相違点を意識させ、各自の考え方を広げさせる。

(5) ねらい

自分が社会の一員であるという自覚を深め、互いに協力し、よりよい社会を実現しようとする態度を育てる。

(6) 指導過程

	学習活動	指導の意図(※)と指導上の留意点(☆)	評価の観点
導入	<p>1 自分たちの地域行事や自慢できることについて想起する。 ○多摩市(または住んでいる地域)にはどのような行事や自慢できることがあるか。</p>	<p>※どんどやき、花火大会、お祭り、キャンプなど、生徒から自由な意見がでるようにする。 ☆「せいせき多摩川花火大会」会の写真と、多摩中学校校庭で行われているどんど焼きの写真を掲示する。</p>	
展開	<p>2 資料『花火大会』を読んで、登場人物の気持ちについて話し合う。 ①先輩たちがかっこよく思え、わたしの心は揺れた。」とあるが、わたしはどのような気持だったのだろう。 ・朝早くで大変そう、自分にできるだろうか。 ・あこがれの先輩たちが参加してよかったと言っていたから、参加しようかな。 ②花火大会がボランティアの実行委員で運営されていると聞いて、直子はどう思ったか。 ・花火大会の会場周辺がきれいになっていたのは、ボランティアの人たちのおかげだったんだ。</p>	<p>※ボランティア活動の意義については理解しているものの、自発的な行動までには至っていないという直子の揺れ動く気持ちを共感させる。「心は揺れた」という表現から、「面倒である。」という気持ちと、「やってみようかな。」という両方の気持ちを押さえる。 ※この花火大会は、ボランティア一人一人の協力や周りの人たちの協力で成り立っていることに気付かせる。</p>	<p>【ア】 【ア】</p>
3	<p>DVD 資料「せいせき多摩川花火大会実行委員長へのインタビュー」を視聴した後、清掃活動に参加した直子か</p>	<p>※自分との関わりで道徳的価値について考えられるよう、実際に「せいせき多摩川花火大会」</p>	<p>【イ】 【ウ】</p>

	<p>ら話しを聞いた生徒の気持ちになって考える。その後、グループで発表し、話し合う。</p> <p>○あなたが直子のクラスメイトだと して、直子から花火大会翌朝の清掃活動についての話を聞いた時、あなたはどのようなことを直子に話しますか。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・中学生が地域の行事のお手伝いをする ことがこんなに話題になるなんて、びっくりだね。自分たちができることを 手伝っただけで、こんなに役立てるなら、 花火大会だけでなく、いろいろな地域活動に 参加してみようかな。 ・花火大会が地域の実行委員の人やうちの 中学校の生徒の清掃活動などのおかげ成り立 っているなんて、知らなかった。来年は一緒 に参加したいね。 	<p>の実行委員長さんへのインタビュー映像を視聴させる。</p> <p>※自分が直子のクラスメイトであると仮定する。道徳的価値を自覚する手立ての一つとして、自分が直子と対話する場面を設定する。資料の中の人物と対話するという場面の中で自分自身を振り返り、自らの価値観を見つめさせる。よりよい社会の実現に向けての気持ちの芽生えと自分の考えを重ね合わせて考えさせる。</p> <p>☆発表している友達の考えと自分の考えの共通点や相違点に注意しながら聞くように指示する。</p> <p>☆ワークシートに対話の内容を記入後、3人または4人のグループで発表し合い、感想や感じたことについて話し合う。</p>	
<p>終末</p>	<p>4 教師の説話を聞き、本時のまとめをする。</p> <p>○4年前に初めて多摩中学校の生徒が花火大会後の清掃活動に参加した話や 昨年のことについて話す。</p> <p>○ワークシートに感想を記入する。</p>	<p>☆当日参観予定の前多摩市長の渡辺さんや、花火大会実行委員の小林さんなど、花火大会に携わっている方を生徒に紹介し、余韻をもって終わる。</p>	<p>【イ】 【ウ】</p>

(7) 評価

【ア】道徳的価値についての理解

よりよい社会をつくっていくために、自分が社会の一員であるという自覚を深め、互いに協力していくことの大切さを理解することができたか。

【イ】自分との関わりで道徳的価値をとらえる

自分が社会の一員であるという自覚を深め、互いに協力していくことが、よりよい社会をつくっていくことを、自分のこととして考えることができたか。

【ウ】道徳的価値を自分なりに発展させていくことへの思いや課題

よりよい社会の実現のために、自分が社会の一員であるという自覚を深め、互いに協力しようとする態度を育てることができたか。

5. 自作資料「花火大会」

内容項目4 - (2) よりよい社会の実現

わたしは直子、この4月に中学生になった。中学校ではバスケットボール部に所属し、毎日楽しく活動している。入学して三か月たったある日、わたしは渡り廊下で「チョボラのある学校にしよう！」と大きな字で書かれた生徒会のポスターを見つけた。気をつけて見ると、校舎のあちこちにはらわれている生徒会ポスターにも「チョボラ」という言葉が書かれていた。

「チョボラってなんですか？」

放課後、職員室に行った時に担任の先生にたずねてみた。

『ちょっとしたボランティア』を省略した言葉だよ。うちの学校は、ボランティア活動が盛なんだ。」

そう言いながら、先生が地域のミニコミ誌の記事の切り抜きを見せてくれた。

「これは、去年の記事だよ。『せいせき多摩川花火大会』の翌日の清掃活動に、うちの学校の生徒が三十三名参加したんだ。朝六時半から地域の人と一緒にゴミ拾いをしたんだよ。今年も募集するから、直子さんもどうかな？」わたしは、今までボランティアをやりたいと思ったことは一度もなかったし、突然のことだったので、

「考えておきます。」

と、小さく答えた。花火大会後の清掃なんて、ゴミがいっぱいで大変そう。

おまけに朝早くなると冗談じゃない、後でそんな気持ちになった。

その日の放課後、バスケットボール部の先輩が、花火大会後の清掃の話をしていて。キャプテンの裕二先輩や、智子先輩、麻起子先輩も去年参加したというのだ。わたしはボランティア活動には全然興味をもっていなかったのだから、あこがれの先輩達が皆参加したということに驚いた。だから思わず、「清掃活動のために早起きしたんですか？ゴミは臭くありませんか？」

と言ってしまった。すると、裕二先輩は笑顔で答えてくれた。

「オレもね、最初はそう思った。無理やり友だちに誘われてさ。正直、面倒くさいと思っていたんだよ。ミニコミ誌の取材がくるとか、ジュースがもらえるとか、結構不純な動機で参加したんだ…。でも、思い切って参加してよかったよ。」

智子先輩もうなずきながら答えてくれた。

「わたしも同じようなものよ。ボランティア活動でも友だちと一緒に楽しめるかなと思って。当日が近づくとつれて、いよいよ明日だなあ、がんばっちゃおうかな、と思ったの。」

裕二先輩や智子先輩は一学年先輩だけれど、自分よりずっと大人に感じた。先輩たちがかっこよく思え、わたしの心は揺れた。その時、麻起子先輩から、

「一緒にやらない？」

と声をかけられたわたしは思わず、

「はい。」

と答えていた。

花火大会当日の八月五日、いつもは自宅近くから花火を見ていたが、多摩川の河川敷にある会場で見ることにした。会場は多くの人でごった返していた。夜七時半、最初の花火が打ち上げられた。会場で見ると花火は想像以上に迫力があつた。ドーン、ドーンと腹に響くような音。頭上からキラキラ星が落ちてくるような感覚。暑い夜空を吹き飛ばしてくれるようだった。わたしは花火に酔いしれた。

時間はあっという間に過ぎ、帰る途中、



「ゴミをお持ち帰りください。」

と呼びかける人の声が聞こえた。ポイ捨てされたタバコの吸い殻から煙があがっていた。翌朝、わたしはここでゴミ拾いをするのだ…。そう考えると、少し不安になった。

翌朝の六時半、駅前広場に中学生とその保護者をはじめ、商店街、自治会、市役所、老人会、市民団体など、多くの人が集まった。先輩たちの姿も見えた。

いくつかのグループになり、いろいろなルートに分かれて、駅から花火大会の会場に向かって多摩川に向かってゴミ拾いを開始するということだった。中学生は5人ずつ各グループに入った。わたしは自治会長をしている渡辺さんのグループに入った。渡辺さんが自分のグループの人たちに呼びかけた。

「花火大会の会場までこのグループで行動します。今日は初めて参加する中学生もいます。皆で急がず休みながらゆっくりやりましょう。中学生の皆さんは聞きたいことや困ったことがあったら、遠慮なく言ってください。」

わたしは、渡辺さんの言葉を聞いてほっとした。朝早くて眠たいし、ずっとゴミを拾い続けることができるか自信がなかったからだ。全員に集めたゴミを入れる袋と軍手が配布され、清掃活動が始まった。

「えー、何これ。缶の中に飲み残しのジュースがまだ入ってる。きたなーい。」

「こっちなんで、紙袋の中にゴミがいっぱい入ってる。なんで持ち帰らないのかなぁ！」

中学生は大騒ぎしながら活動していた。

「これでも年々来場者のマナーがよくなっているんだよ。数年前はゴミを置いて帰る人がもっと多かったんだ。」

と、渡辺さんが教えてくれた。

「これでもよくなったんですか…。」

わたしはこれでよくなった状態なら、以前は本当に大変だっただろうと思いをめぐらせた。

「この花火大会はボランティアの実行委員で運営されているんだよ。」

「えっ、そうだったんですか。」

わたしは花火大会の運営がボランティアということに驚いた。

「花火大会実行委員会で、どうしたら花火大会が成功するのかを毎年話し合っているんだよ。ゴミ問題一つについても、なんとかしようとして話し合った結果、ゴミの持ち帰りを呼びかけることにしたんだ。そうしたら、とても効果があったんだよ。」

「昨日の花火大会で、ゴミ持ち帰りのアナウンスを聞きました。他にも何か問題があるのですか？」

わたしは続けて質問した。

「やはり、安全面のことかな。花火大会をやると問題になるのが場所取りのことなんだ。いい場所をとるために、何日も前からシートを敷いたり、泊まったりする人がいて、トラブルがあったんだ。そこで思い切って場所取りを禁止にしたんだよ。」

「当日は午後三時半以降じゃないと、花火大会の会場に入れないうえですね。」

と、わたしは答えた。

「そう、それを実行した初めての年は、苦情がいっぱいきた。」



渡辺さんは苦笑して続けた。

「でも、それが、すんなり収まっちゃったんだよ。」

「なんでですか？」

わたしはその理由を知りたいと思った。

「実行委員が自分たちと同じ市民だと分かったからかな。」

「え、どういうことですか？」

わたしはさらに聞いた。すると、渡辺さんは、

「すばらしい花火大会にしようとボランティア活動をする人たちに、苦情なんて言えないんだよ。」

わたしは少しわかったような気がした。

わたしは周囲の人たちと話したり、休んだりしながらゴミ拾いを続けた。途中、通りがかりの人に、
「ありがとう。とても助かるわ。」

と、声をかけられた。花火大会の会場近くにたどりついたときには、ゴミ袋はいっぱいになっていて、その重さで手がだるくなった。マナーがよくなってきているとはいえ、楽な活動ではなかった。

「何でこんなことしなきゃいけないの。」

他の中学生も疲れてきたのか、不満も出始めた。

「あと、少しで会場だぞ。頑張ろう！」

だれかが励ましの声をかけてくれた。後ろを振り返るときれいになっているのが見えた。花火大会の後、会場周辺がいつもきれいになっているのは、陰で支えている多くの人々の活動があったからなのだ気付いた。

午前九時前には花火大会の会場となった河川敷で全員が合流した。参加者に飲み物が配布されたので、わたしは先輩や友だちと一緒に、多摩川の土手に座ってジュースを飲んだ。明るい日差しが川面に反射して、キラキラ輝いていた。川から吹いてくるさわやかな風をほおに感じ、疲労感と充実感がとても心地よかった。

この清掃活動に参加してよかったと私は心から思った。この活動を通して、わたしの中に今までなかった気持が芽生えてきた。

帰り道、裕二先輩に話しかけられた。

「参加してよかったですか？」

「はい！自分でもびっくりです。わたし自身こんな気持ちになるとは思いませんでした。」

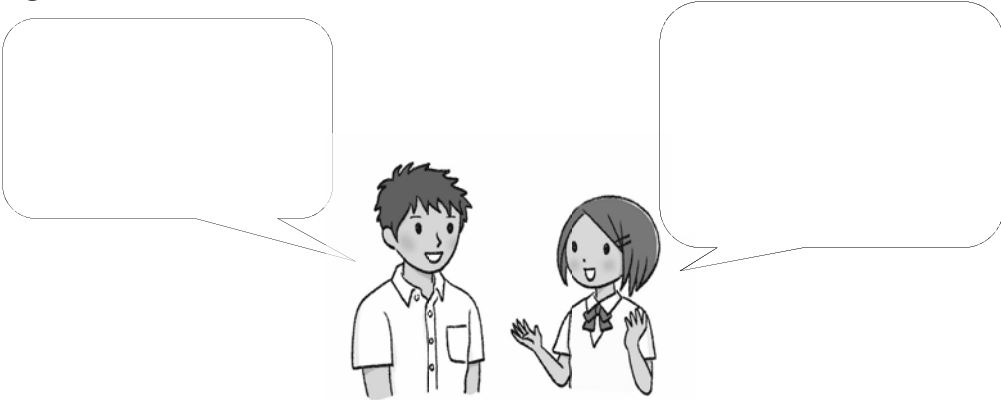
わたしは、自分がちょっぴり大人になったような気がした。



(三浦 摩利 作)

(くどうのぞみ 絵)

6. ワークシートについて

「花火大会」ワークシート	～男子生徒用～
()年()組()番 氏名()	
①「先輩たちがかっこよく思え、わたしの心は揺れた。」とあるが、わたしはわたしはどのような気持だったのだろう。	
②	
③	
	

☆女子生徒用ワークシートは直子さんと女の子二人が話しているイラストのものを用意した。

7. 成果と課題

自作資料、VTR、ゲストティーチャーなど生徒の共感を得るための工夫をしたので、生徒は積極的に取り組むことができた。ただ、工夫をたくさん用意したために、大切な話し合いの時間に多くの時間をとることができなかつたのが、一番の課題であった。

生徒の興味関心をひくことに重点をおくのではなく、効果的な話し合いができる工夫に重点をおくようにしたい。また、今回は4人での話し合いを実施したが、話し合いの形態を固定化せず、今後の生徒の実態に応じて工夫していきたい

自作資料、自作のDVD、ゲストティーチャーなど、生徒の共感を得るための工夫をしたので、生徒は積極的に授業に取り組み、「授業は楽しかったか」というアンケート項目の「とても」に○をつけた生徒は36名で、95%であった。

授業後、生徒が地域のことに興味をもち、「これからボランティアをやってみたい。」「どんな活動があるのか。」などと聞いてくる生徒が増えてきたことが嬉しい。また、地域郷土資料を使った道徳授業ということで、多摩市の前市長、教育委員、花火大会実行委員、民生委員等、多くの地域の方々が参観し、生徒に声をかけてくれた。地域郷土資料をきっかけとして、地域とともに連携して道徳教育を進めることにつながったことが一番の成果であった。

8. 生徒の感想

・市民や人のために何かができるのはすごく良いことだなと思いました。誰かのために人は生きてい
るんだなと感じました。一人ではできない事は協力してやっていけばいいと思いました。

・私も、今年のボランティアには参加するので、がんばりたいと思いました。人の意見も聞いてよか
ったと思いました。

・ボランティア活動などは1回も参加したことがないけど、話を聞いてボランティア活動に参加した
くなりました。花火大会には色々な人が関わっていることを知りました。来年は参加しようと思いま
す！！

・毎年花火大会の花火を見ていました。でも、私のおばあちゃんの家庭や近くの夕日の丘公園とい
う所から見ていて、多摩川まで行ったことがありませんでした。中学に入って、多摩中の先輩が清掃
をしていることを聞いた時、びっくりしました。なぜ、いつも川がきれいなのか??とっていたの
で、その話を聞いた時、きれいにしてくれた人に感謝しなきゃと思いました。今年は私達ががんばら
なきゃと思いました。

・私たちが知らないことをたくさん知ることができてよかった。私はボランティアとかあまり興味
がなかったけど、この授業を終えて、少し興味を持てたかなと思う。

・とても楽しい授業だった。知らなかったことが知れた。花火大会の後、川がキレイになっているの
は、かげで色々な人が頑張っているから。だから、私は、花火大会でも、他の所でも、ゴミを捨てず、
ちゃんと持ち帰りたいと思いました。

・清掃活動に中学生が33人も参加したのにすごく驚きました。あと、6時30分に集合するのが早く
て、起きられないから行くのが嫌だったけれど、「すごく気持ちよかった」と言っていたから、行って
みようかなと思いました。

・「チョボラ」の大切さを知りました。私も積極的にボランティアをしたいなと思いました。そして、
人の役に立つこともしたいなと思いました。(授業に)たくさんの方が来ていて、とても驚いたけれど、
みんなは発言をたくさんしていて、すごかったです。

・ボランティアに参加している多摩中生がたくさんいるとは知りませんでした。私も夏休み、用事が
ない限り、多摩川清掃に参加したいです。ビデオは本当に番組を見ている
ようでした！

・この授業を受けて、ぼくは清掃に行こうと思いました。そして多摩市
民を喜ばせたいです。

・この授業を受けたらびっくりしたことがありました。びっくりしたこ
とは花火大会のことです。あの大きなイベントにこの学校も関わって
いるということです。あの清掃がないと花火大会のイベントはありません。
そう考えると、この清掃はとても重要だと思いました。そして、この清
掃に本気で「ぼくも関わりたい」と思いました。

